

縁は異なるもの、味なもの 10、20年後を見据えて、人脈を大切に



49歳2児の父親、埼玉に住んでいる落語家の三遊亭鬼丸です。「シニアライフ案内士」のナビゲーターを務めている私から、メルマガ第4号をお届けします。

さて、コロナ禍で酒席はとんとご無沙汰で、寂しいですね。「家で飲むなら、外で飲め」。若手の時分によく言われたものです。これは、おかしな酔っぱらいを見るだけで芸の肥やしになる、というありがたい教えです。

そしてもう一つ、縁が仕事を広げるからです。落語家の仕事は人脈頼みです。ちょっとした縁からいただいた仕事が次につながり、やがて大きく広がることも少なくありません。

飲み屋で、隣の客から職業を問われたら好機到来です。何しろ落語家は全国に約800人ですから、東大卒よりもぜんぜんレア。相手が関心を持たないはずがありません。

もし、その人が自治会長だったら、夏祭りに呼んでいただけるかもしれない。そして、祭りに参加した人の勤め先から催しに呼ばれ、そこに招待されていた取引先からさらに声が掛かる、かもしれない。これは、世にも希少な落語家だからこそ、夢のような仕事の数珠つなぎ。これが人の縁、人脈というものです。

私は「歌ご」「きん歌」「鬼丸」と名前は変わりましたが、365日24時間、落語家として生きてきて今がある、と思っています。さて、皆さんはどうですか。これまでの仕事で広げてきた人脈は、趣味の世界や定年後の付き合いでも生きるのでしょうか。

人脈が何よりも大切という人がいますが、よく考えると、力のない人ほど人脈に頼りがちにも思えます。異業種交流会で名刺を交換して、こんなに有名な人と知り合えたとなつて満足してしまう。名刺のコレクションを眺めて、肩書に振り回されているのではまだまだ小物です。

と書いたものの、実は私もその一人でした。若い頃は社長の名刺だけを大切にしていたのですが、実際に企画を練り上げるのは現場だと気づきました。さらに、5年、10年とお付き合いを続けると現場を仕切っていた担当者が社内で力をつけていきます。

人脈は、あるから事を成せるのではなく、結果として力になるものだと思います。だからこそ、人の縁やつながりは不思議で面白い。10年後、20年後のシニアライフを見据えて、今から大切にしたいものです。

自分が落語家だということを、飲み屋で隠しているという若手には、きつく諭してます。

「外で高い酒を飲むのは、名前を売る値打ちがあるからだろう」